



TITLE:

現代チュニジアのイスラーム信仰 実践におけるマテリアリテーク ルアーン装飾具とオリーブの事例 からー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

二ツ山, 達朗

CITATION:

二ツ山, 達朗. 現代チュニジアのイスラーム信仰実践におけるマテリアリテークルアーン装飾具とオリーブの事例からー. 京都大学, 2016, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19845>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2017-03-22に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	二ツ山 達朗
論文題目	現代チュニジアのイスラーム信仰実践におけるマテリアリティ ークルアーン装飾具とオリーブの事例からー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、イスラームの信仰実践においてモノがどのように関わっているかを、現代チュニジアにおけるクルアーン装飾具とオリーブを事例として考察するものである。イスラームの人類学において議論されてきた問いの一つに、ムスリム民衆が日々の暮らしのなかで、イスラームの教義や概念をどのように体験しているかということがある。しかしながら、構造人類学や解釈人類学といった手法においては「言語」や「文化」を通じた考察が主であり、これらの体験を支える具体的なモノが正面から扱われてこなかった問題点が指摘されている。</p> <p>本論文はこのような課題をふまえて、モノと物質性がムスリムの信仰実践にどのような働きかけを行い、また逆に人の働きかけによってそれらモノと物質性がどのように変化しているかを問うており、5章からなる本文と序論・結論で構成されている。</p> <p>第1章は、イスラームの人類学における「物質論的転回」に至る先行研究を精査しながら、その理論的問題点と課題を指摘する。特にギアツとアサドの論争からモノへの注視に至る系譜を検討するなかで、ギアツの象徴の体系においてもモノへの視座が存在していた点、物質性が周囲の人や環境によって変容する点、調査者が前提とする物質性とフィールドの物質性が一致するとは限らない点を、「物質論的転回」における課題として指摘している。</p> <p>第2章は、イスラームにおけるバラカ（祝福・恩寵）概念について、先行研究における議論をもとにして考察する。従来のバラカ研究においても、モノが登場する事例が多く扱われてきたが、聖者などの人や、地域社会との関係においてバラカを考察する点で、モノそのものを考察していない点を指摘している。</p> <p>第3章は、チュニジアとチュニジア南東部のイスラームの歴史的・地理的な概括をすることで、本論文の事例の背景を論じる。同地域の民衆のイスラームは、歴史的にも多様性を有しており、その多様性をかたちづくる要因として、自然環境が働いていることを論じている。</p> <p>第4章は、クルアーン装飾具を事例に、ムスリムの日々の空間と信仰実践にクルアーンが記されたモノがどのように関わっているかを考察する。装飾具はバラカをもたらすと説明される一方で、他の装飾具同様に、2年の調査期間で約半分が消失する。一方、越年後に用途がなくなるクルアーンカレンダーは、広告部分や日付部分を切り取り、ポスターや額縁につくりかえられている。これらの事例から、グローバル化や市場経済化の浸透によって大量に生産されたモノであっても、消費財にならぬよう使用者によってモノの物質性を利用したつくりかえがなされることで、彼らの空間に存在し続けていることを示した。</p> <p>第5章は、イスラームのバラカ概念とオリーブの物質性の関係について考察する。</p>			

「オリーブは不死だからバラカである」という語りに焦点を合わせ、宗教的語りだけでなく、利用法を克明に記述する。オリーブの樹は土壌の一部が農民によってつくりかえられ、かつ木炭製造を伴う農法によって存続し続けることができること、このようにして存在する樹にとっての不死性は、個体や樹齢などの点において我々が一般的に想定するものとは異なることを示している。

これらの議論をふまえて結論では、バラカという概念を感得させるモノは、人によってつくりかえられ、そのモノの性質も環境と人の関与によってはじめて顕現するものであること、このようなモノとその物質性は、それを目的としてつくられているか否かに関わらず、宗教概念を感得させることがあり、またそのような概念によって新たにモノがつくりだされていると論じている。このような議論から、象徴の体系と該当地域における物質的環境と人が、相互に作用を与える様を描くことが、イスラームの多様な信仰実践を考察することにつながると結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、イスラームの信仰実践におけるモノとマテリアリティ（物質性）を問い直そうという意欲的な試みである。イスラームの信仰において重要な位置を占めるバラカ（恩寵・祝福）という概念は、さまざまな位相に顕現すると考えられてきた。ただし従来の研究では、聖地や聖者廟といった場所や木や石といったモノについても、それをたとえば聖者という人の存在に結びつけるような解釈が一般的であった。これに対してモノそのものに着目すべきだという主張もこれまでなされているが、本論文はそのモノとマテリアリティの捉え方そのものに、さらに新たな視座を提供しようとしている。

本論文の学問的貢献は、以下の点に集約される。

第一に、地域研究の根幹にある地域社会の描写を丹念・精密に行っている点である。筆者の現地滞在経験は近年類を見ないほど豊富であり（中東諸国に計47か月の滞在）、それに裏打ちされた民族誌の記述には厚みと説得力がある。これはとくに、第3章で地域を描いている部分に顕著にみとることができる。

第二に、イスラーム学と中東地域研究の架橋に成功している点である。イスラーム思想において鍵概念であるバラカ概念について第2章で正確に祖述したうえで、イスラーム世界一般におけるバラカ概念とは別に、調査地であるチュニジアにおいてはその土地の生態に規定された独自のバラカ概念が考えられると提言する。普遍的なイスラーム思想研究と、フィールドに根差した地域研究の融合の好例と評することができる。

第三に、文理融合をほんとうの意味で成し遂げていることである。文化人類学を基礎としながらも、自然地理学・生態人類学をよく学び、土壌や植生についての着実な知識を元に、議論を展開している。このことは、第5章のオリーブについての分析においておおきな効果を発揮している。

第四に、理論的貢献を挙げることができる。それは、イスラームの人類学における「物質論的転回」に対する考察と新しい提言である。これは本論文の骨格をなす議論であり、第1章と結論において詳細に論じられている。そこでは、ギアツとアサドの論争を丹念に跡づけ、アサドによるギアツ批判の不十分さを指摘し、筆者自身の新しい見解を提示している。

第五に、この筆者自身の新しい見解と密接に関わる部分であるが、モノとマテリアリティそのものを根底から問い直したことが挙げられる。筆者は文理融合の手法により、チュニジア南東部におけるオリーブの植生について詳細に述べたうえで、この土地には一般に考えられているのとは別の「不死性」概念があることを指摘する。モノとマテリアリティを語る際、一般にはそれを世界中で共通のものと自明視しがちだが、前提となるマテリアリティそのものが地域によって異なるという指摘は斬新である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。ま

た、平成28年2月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。